

第2節 讃良地域の古墳時代前期

1. はじめに

岡山南遺跡の調査では、布留2式期の良好な一括資料を含む古墳時代前期の遺跡を調査することができた。岡山南遺跡が属する讃良地域（寝屋川市南部・四條畷市・大東市北部）においては、これまで忍岡古墳の存在は知られていても、近年まで古墳時代前期のまとまった集落が知られておらず、第二京阪道路建設に伴う調査等によりようやくその存在が明らかになってきた経緯がある。ここではそれらの遺跡も概観しながら、岡山南遺跡を含むこの地域の古墳時代前期について歴史的状況を整理し、岡山南遺跡の位置付けについても検討したい。

これまでに讃良地域の古墳時代前期については、忍岡古墳の存在についてのみから語られることが多かった。それは、忍岡古墳以外にこの地域で古墳時代前期の古墳や集落遺跡などがほとんど知られていなかったためである。その状況に変化が生まれてきたのは第二京阪道路の発掘に伴い、庄内式期から布留式期にかけての集落域や墓域の調査が進んでからである。

おもに墳墓の面から検討したものとしては、西田敏秀による北河内地域全体の検討や（西田 2009）、野島稔による讃良地域中・南部の古墳時代全体を通じての検討（野島 2009）などがあげられる。

おもに集落という視点から検討したものとしては、濱田延充による一連の検討や（濱田 2004、2009）、市村慎太郎による竪穴建物に重点を置いた検討（市村 2009）などがある。

首長墓と集落の関係という視点では、井上智博が第二京阪道路の調査段階から小路遺跡の前方後方形周溝墓と周辺集落との関係について注意した（井上 2004）。その後福永伸哉や（福永 2008）、田中元浩（田中 2009）がその点について検討を行い、米田敏幸は土器編年と古墳の対応の検討を行っている（米田 2013）。

また全体の概観として一瀬和夫はこの地域も含め地域・時期とも全体を通してみた遺跡の概観を行っている（一瀬 2005）。

首長墓と集落の関係性は、上記にあげたような検討で、小路遺跡の前方後方形周溝墓については盛んに言及がみられるが、忍岡古墳についてはあまり活発とはいえない。本節では、忍岡古墳と周辺集落の関係性についても検討し、そのなかで今回発掘調査した岡山南遺跡の成果を位置づけるとともに、讃良地域の古墳時代前期における動態について整理することとしたい。

2. 讃良地域古墳時代前期の首長墓（1）小路遺跡前方後方形周溝墓

讃良地域の首長墓として、まず出現するのは寝屋川市の小路遺跡で検出された前方後方形周溝墓と言ってよいであろう（木下編 2004、六辻編 2006）。小路遺跡では、一辺数mから10m前後の方形周溝墓群が見つかったが、その墓群の中に1基、全長22.7mと卓越した規模の前方後方形周溝墓が含まれていた。この周溝墓は後方部が長さ12.2m、幅10.2mで、前方部は長さ10.5m、前方部端の幅7m、くびれ部の幅3.4mであった。周溝墓の上部は削平されていて主体部はみつからなかったが、周溝内で土器が見つかり、出土した土器から庄内式～布留式期初頭の周溝墓とみられている。

この周溝墓の周囲ではほぼ同時期の方形周溝墓群も検出されていて（木下編 2004、黒須編 2004）、墓域の中の一基の墳墓が卓越した規模となっている状況を読み取ることができる。

他の方形周溝墓群と同一墓域に築かれているという点では、のちの典型的な前期古墳とは異なる様相であるが、卓越した規模をもっている点、墓域にある他の周溝墓と異なる墳形である点から、やはり首長墓として取り扱ってよいであろう。

3. 讃良地域古墳時代前期の首長墓（2）忍岡古墳

小路遺跡の前方後方形周溝墓の後に北河内南部随一の規模で造られたのが、全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳である。古墳は東側からのびる丘陵尾根の西端に位置していて、現在墳丘上には式内社である忍陵神社が鎮座している。古墳からの眺望は非常によく、古墳時代には眼下に河内湖と湖岸にあったであろう集落の様子をみることもできたことであろう。この古墳は、昭和10年（1935年）の京都大学による調査で発見された（梅原 1937）。古墳の墳丘は当時から既に改変されていたが、当

時残存していた墳丘から、古墳は一段低い基壇のような部分を持つ二段築成の前方後円墳で、主軸を南北方向に向けた後円部径約 45.5m、高さ約 6 m、全長約 87.9mの前方後円墳と想定された。墳形については、四條畷市教育委員会で行った調査で、前方部の裾がバチ形に開く可能性が想定されている（野島 2006）。葺石は存在しなかったようだが、円筒埴輪は後円部の上を中心に立てられていたようである。

主体部は後円部のほぼ中央に位置し、古墳の主軸とほぼ平行する南北方向のもので、安山岩質の板石材を積み重ねた長さ約 6 m、幅約 1 m、高さ約 1 mの竪穴式石槨（石室）である。底部には 2～30cm ほどの厚さで粘土を敷き、その上に、一本の木を縦に二つに割り中を刳り抜いた割竹形木棺が設置されていたとみられる。想定される棺の大きさは長さ約 5.7m、幅約 0.75mであった。埋葬施設の床面は北側がやや高く傾斜していて、頭が北側で埋葬されていた可能性がある。

この石槨はすでに盗掘されていて、北半分のほとんどが破壊されていた。粘土床の下部はすぐに古墳の盛土となっていたが、石槨の壁部分の下には厚い砂利敷きの地固めがしてあり、東側ではそれが厚さ 60cm 以上あった。さらに、北側ではそれが粘土の縁から 90cm を超える厚さがあり、加えて下部は粘土の設置面より 20cm ほど深く掘られ、その基底にやや大きな割石を並べ、その上に砂利を重ね置いた構造であった。これはその上に築かれる側壁を支えるための基であるとともに、排水施設が設けられていたものとみられる。このような構造は四條畷市教育委員会で行った再調査でも確認していて、その結果を合わせると、排水施設は東西南北の各方向に設けられていたようである。

石槨の内部は一部盗掘にあっていたが、南側部分を中心に一部の副葬品が残っていて、碧玉製石釧 1、碧玉製鋏形石 1 以上、碧玉製紡錘車 6、鉄剣 2、鉄大刀 1、鉄鉾 2、鉄鎌 2、鉄刀子 1、鉄小札 数点、木製刀装具一括、鉄斧 3、鉄鉈 1、鉄鏃片がみつかった。これらは盗掘のため原位置を保っていたとは言い難いものも多く含まれるが、その出土状況は、石槨南側の壁に近い床の縁に刀剣片があり、粘土床の U 字状に窪んだ部分、つまり棺内の東南端で鉄斧が、西隅で鉄片がみつかった。また、石槨の中央から南に偏在して鉄片が多くあり、その東南の壁に近い部分から鉄片に混じって紡錘車をはじめとした主な石製品が出土した。このうち完形の紡錘車 4 点は、2 点ずつ重なって出土した。これが原位置に近い位置からの出土であるとすれば、棺内には鉄斧等の工具類の一部が副葬され、鉄製刀剣類や石製品類などは棺外に副葬されていた可能性がある。

紡錘車のうち四点は完全な形でみつかっており、大きさもほぼ同様に、直径は 4.5～4.8cm ほど、高さは 1cm ほどであり、中央の孔は片側から穿孔したものであった。木製刀装具は、同時にみつかった鉄大刀にともなうもので、把縁の部品とみられ（櫻井 2012）、直線と曲線を組み合わせた特徴的な紋様が彫られている。鉄小札は数点が出土していて、いずれも 3.5×3.3cm ほどの大きさである。その形から小札革綴の破片とみられる。

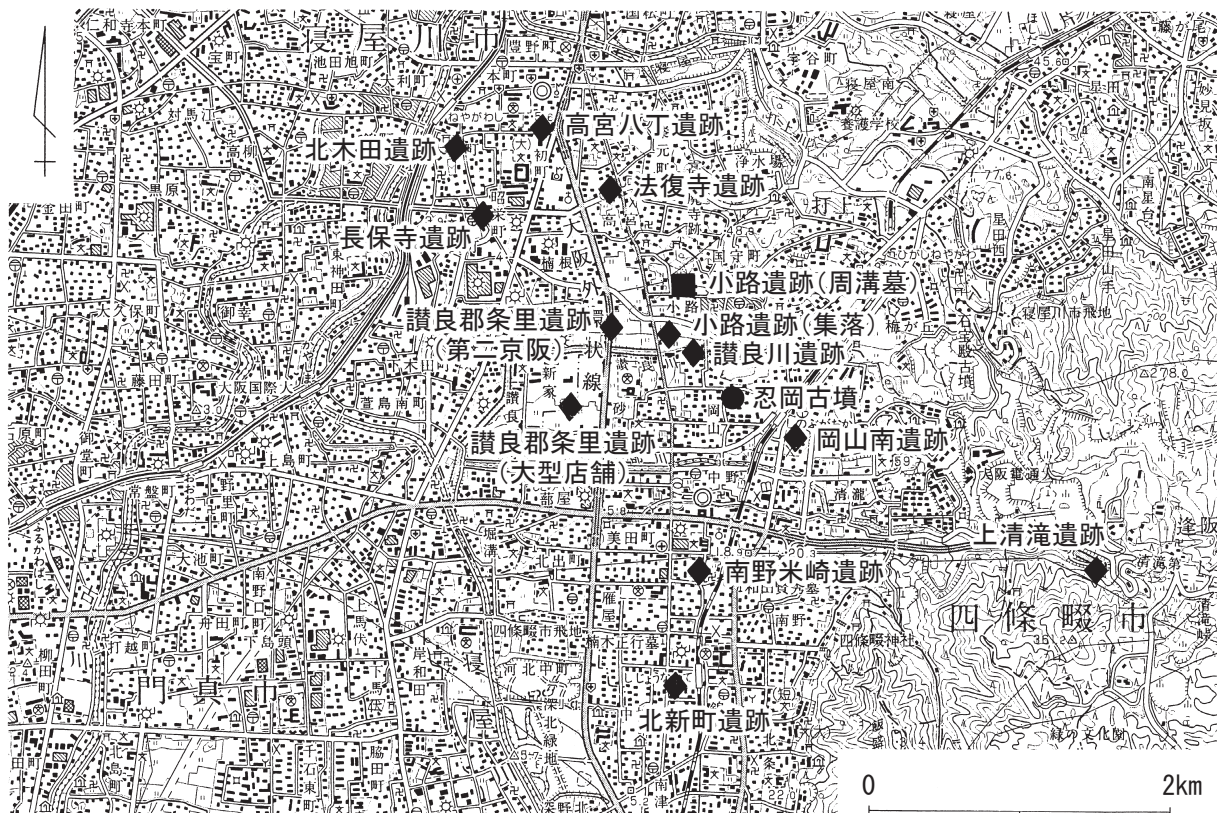
また、これら以外に盗掘により破壊されていた部分から、円筒埴輪片が出土している。これは、古墳の後円部の上を立てられていたものが、盗掘により石槨の部分に落ち込んでしまったものとみられる。また四條畷市教育委員会で行った調査でも円筒埴輪片が出土している（野島 2006）。

忍岡古墳は、盗掘されていたため副葬品のすべてはみつからなかった。おそらく、盗掘されていた石槨の北側に、銅鏡数枚や被葬者が身につけていた玉類などがあつたのではないかと考える。銅鏡は数枚であれば被葬者の頭の上に、玉類は被葬者の胸の位置などに副葬されることが多いが、北側は床面の傾斜から頭側の可能性があり、このこともこの位置に鏡や玉があつた可能性を示すとみる。

4. 副葬品からみた忍岡古墳の位置付け

忍岡古墳は、墳丘の規模や残されていた副葬品の内容から、古墳時代前期中頃の、北河内南部地域における首長墳であると考えられる。

忍岡古墳で出土した遺物をみると、古墳時代前期の中でも先出する要素と、後出する要素とが混在している。小札革綴は、古墳時代前期の中でも前半の古墳に副葬されることが多い古いものである（橋本 1996）。腕輪形の石製品（石釧や鋏形石）は、古い型式のものが副葬されている。石釧は蒲原編年の I-a 1 型式にあたり（蒲原 1987）、鋏形石も最古型式である（北條 1990）。一方で、碧玉製紡錘車は、清喜裕二による第二段階にあたり、やや新しい型式のものが副葬されている（清喜 2013）。



第 19 図 讃良地域の古墳時代前期遺跡

(国土地理院 5 万分 1 地形図「大阪東北部」(2008) に加筆)

刀装具の紋様も、この種の紋様の中ではやや新しいものとされる（櫻井 2012）。円筒埴輪は、川西編年Ⅱ期のものが含まれているようである（川西 1978）。こういった要素を考え合わせると、忍岡古墳は古墳時代前期の中でも中ごろの古墳と考えることができるであろう。『前方後円墳集成』編年（近藤編 1992）では 2～3 期、大賀編年（大賀 2002）では前Ⅳ～Ⅴ期ごろにあたとみておきたい。

ここで注目したいのは、この古墳から小札革綴冑が出土していることである。この小札革綴冑は、中国系の製品である可能性が高く（高橋 1995）、全国で十数古墳からの出土が確認されていて、奈良県の黒塚古墳や、京都府の椿井大塚山古墳など、三角縁神獣鏡を多量に副葬する有力な古墳でみつかると傾向が強いものである（福永 2009）。この小札革綴冑が出土していることは、忍岡古墳の被葬者が、当時のヤマト王権と密接な結びつきがあり、そのために中国系の製品である冑を下賜された可能性があることを示している。忍岡古墳の被葬者は、ヤマト王権内で一定の地位を得ていた人物だったと考えられる。

副葬されていた遺物には刀剣類や鉄鏃などの豊富な武器類や、腕輪形石製品の中でも男性的な要素を持つ鋌形石が含まれており（小栗 2008）、この古墳に葬られていた人物は男性であった可能性がある。

忍岡古墳は、眼下に河内湖が広がる丘陵先端部に造られている。忍岡古墳の被葬者は、河内湖を使った船による流通を掌握し、ヤマト王権内での地位を得ていた人物だったのであろう。

5. 讃良地域古墳時代前期の集落様相

小路遺跡の前方後方形周溝墓に対応するもしくは近接した時期にあたる、庄内式期～布留式初頭の集落は、前方後方形周溝墓の位置からみて南側で最近庄内式期を中心とした集落がみついている（寝屋川市教育委員会 2015）。前方後方形周溝墓からみて南西 200m の、讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調

査地では庄内式期はじめごろの堅穴建物群が検出されている（井上編 2008）。長保寺遺跡では河川内から庄内式期の土器がまとまって出土している（濱田 1993）。法復寺遺跡と北木田遺跡でも庄内式期の遺構が検出されている（濱田 2004）。このように讃良地域北部ではこの時期の遺物の出土があり、小路遺跡・讃良郡条里遺跡付近には顕著な集落も存在していたが、讃良地域中～南部ではこの時期の遺構、遺物はみつかっておらず、現在のところ讃良地域中～南部でこの時期の集落の存在を想定することはできない。

その後、忍岡古墳に対応するもしくは近接した時期にあたる布留式期の集落は、讃良郡条里遺跡の大型店舗調査地で布留 1 式期の井戸や土坑と、同時期とみられる掘立柱建物、布留 3～4 式の土器群等がみつかっていて（後川・實盛・井上編 2015）、第二京阪道路調査地の成果（佐伯・六辻編 2007）と併せ、讃良郡条里遺跡はこの時期の比較的顕著な集落と言える。遺物の出土は北木田遺跡で布留式初めごろの、高宮八丁遺跡で布留式後半のものがみられ（濱田 2004、市村 2009）、讃良川遺跡（濱田 2004）や南野米崎遺跡（1984 年度調査）、上清滝遺跡でも布留式期の遺物が出土している。南部では北新町遺跡で布留式期の集落・水田が検出されている（大東市北新町遺跡調査会編 1991、黒田 1997）。ここに今回岡山南遺跡で検出した大溝と布留 2 式期を中心とした土器群が加わった。前段階とくらべ中～南部での集落の伸長が著しく、それに比して北部での遺構・遺物の密度は相対的に低下するが、消滅するわけではなく、讃良地域全体に遺構・遺物が分布しているようである。集落域についても讃良郡条里遺跡付近と北新町遺跡付近に比較的規模の大きな集落が検出されている。

6. まとめ

このように、讃良地域の首長墓と、それぞれに対応する可能性のある集落について検討してきた。讃良地域では、庄内式～布留式期初頭ごろ（3 世紀中ごろ）に小路遺跡で前方後方形周溝墓が築かれる。この墳墓が築かれる基盤となった集落としては、直接的には小路遺跡や讃良郡条里遺跡一帯に存在した集落があげられ、それら以外にも讃良地域北部に衛星的に集落が存在したものともみられる。小路遺跡の前方後方形周溝墓に葬られた首長の基盤となったのは、このように讃良地域北部を中心としていたのであろう。

その後、古墳時代前期中ごろ（3 世紀末～4 世紀初頭ごろ）には忍ヶ岡丘陵先端に忍岡古墳が築かれる。やや空白期間が長い、近接した地域に築かれており、現時点では小路遺跡の前方後方形周溝墓と同一の系譜に属するものとみておく。小路遺跡の首長の次世代もしくは次々世代の首長が忍岡古墳の首長であると考えたい。この古墳の基盤集落としては、現時点では遺構数、遺物量が多い讃良郡条里遺跡の集落が第一にあげられよう。岡山南遺跡は讃良郡条里遺跡よりも古墳に近く、遺物も一定量が出土しているので、集落遺構は未発見だが基盤集落のひとつが存在した可能性は十分にある。これら以外にも遺物出土遺跡が広範にみられ、忍岡古墳の首長の基盤となった地域は少なくとも讃良地域全域にわたっていたものと考えたい。そうした視点でみると、古墳からは 1.7km ほど離れている北新町遺跡も、忍岡古墳の首長の基盤のひとつとなっているとみてよいであろう。

讃良地域の古墳時代前期は、これまで忍岡古墳のみの存在がクローズアップされ、あるいは被葬者は中央から派遣されてきた人物ではないかと考えられがちであった。しかし、近年調査が進んできた結果、首長墓系譜や集落動態を追うことが可能になった。今回の岡山南遺跡での調査成果も、そのような成果の一つであると言える。今後もさらに調査を蓄積し、この地域の古墳時代前期の歴史復元を試みていきたい。

（實盛）